

「外郎売り」の本文

拙者親方と申すは、お立合の中に、御存じのお方もござりましようが、お江戸を発つてにじゅうりかみがた、相州小田原一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへおいでなさるれば、
欄干橋虎屋藤衛門只今は剃髪致して、円音となのりします。

元朝より大晦日まで、お手に入れます此の薬は、昔ちんの国の唐人、外郎という人がわが朝へ来り、帝へ参内の折から、この薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取り出だす。

依つてその名を帝より、とつちんこつと賜わぬ。

即ち文字には「頂き、透く、香い」とかいて、「とつちんこつ」と申す。

只今はこの薬、殊の外世上に弘まり、方々に似看板を出だし、イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと色々に申せども、平仮名をまっつ、「ついでつ」と記せしは親方円音ばかり。

もしやお立合の内、熱海か塔の沢へ湯治にお出でなさるか、又は伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなせわまするな。

お登りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り、破風には菊に桐の二つの御紋を御赦免あつて、系図正しき薬でしげぬ。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、ご存知ない方には、正身の胡椒の丸香、
白河夜船。さらば一粒食べかけて、その気見合いをお目にかけてまじょう。

先ずこの薬をかよつに一粒舌の上のせまして、腹内へ納めますると、イヤごつも云え

ぬは胃心肺肝がすこやかになりて、薰風咽より来り、口中微涼を生ずるが如し。

魚鳥、茸、麵類の食合わせ、其他、万病速効ある事神の如し。

さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわるごとが、銭コヌマがはだして逃げる。

ひょっと舌がまわり出すと、矢も盾もたまらぬじや。

そりやそりや、そらそりや、まわってきたわ、まわってくるわ。

アワヤ咽、さたらな舌に、カ牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、あか

さたなはまやらわ、おこそこのほもよろを、一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、益まめ、

益米、益こぼつ、摘蓼、摘豆、つみ山椒、書写山の社僧正、粉米のなまがみ、粉米のな

まがみ、こん粉米の小生がみ、繻子ひじゆす、繻子、繻珍、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親か

へい子がへい、子がへい親かへい、ふる栗の木古切口。

雨合羽か、番合羽か、貴様のきやはんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆、しっかわ袴の

しっばこるびを、三針はりながにちよつと縫つて、ぬつてちよつとぶんだせ、かわら撫子、

野石竹。

のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来。

一寸先のお小仏におけつまずきやるな、細溝にどじよによろい。

京のなま鱈奈良なま字鱈、ちよつと四、五貫目、お茶立ちよ、茶立ちよ、ちよつと立ち

よ茶立ちよ、青竹茶筥でお茶ちよつと立ちや。

来るわ来るわ何が来る、高野の山のおこけら小僧。狸百匹、箸百膳、天目百杯、

棒八百本。

武具、馬具、ぶく、ばく、三ぶく、三ばく、合わせて武具、馬具、六ぶく、六ばく。

菊、栗、きく、くり、三菊栗、合わせて菊、栗、六菊栗。

麦、し、み、むぎ、し、み、三むぎ、し、み、合わせてむぎ、し、み、六むぎ、し、み。

あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。

向いづの胡麻がらは、荏のこまがらが、真こまがらが、あれこそほんの真胡麻殻。

がらびい、がらびい風車、おきやがれこぼし、おきやがれ小法師、ゆんへもこぼして又こ

ほした。

たあぶほほ、ためほほ、ちりから、ちりから、つつたっほ、たっほたっほ、丁だ、落
ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬものは、五徳、鉄球、かな熊童子に、石熊、石持、
虎熊、虎きす、中にも、東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合つかんでおむしやる、
かの頼光のひげもと去らさず。

鮎、きんかん、椎茸、定めて後段な、そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発地。

小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、小杓子、こ持って、こすくって、ここ
せ、おっと合点だ、心得たんぼの川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は、走って行けば、やいと

を摺りむく、三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天早々、

相州小田原へつちぢな香、隠れぬぬめ貴賤群衆の花のお江戸の花つらつら、あねあの花を見
ておて心。うい。

産子、這子に至るまへ、この外郎の御評判、い存知ないとは申せ、まごつぶり、角出せ、
棒出せ、
て今日お出で、のいすれも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬ、徳せ、引っほ、
東方世界の薬の元々、薬師如来も照覧あれと、ホホ敬って、つらつら、つらつら、つらつら、
ませぬか。